

「HIV感染状態による大腸腫瘍での炎症細胞浸潤の検討」について

【はじめに】 HIV感染者の予後は、抗HIV療法の進歩により大きく改善されました。一方で感染者の加齢に伴い悪性腫瘍の研究の重要性が増しています。大腸癌、肺癌などの発癌に免疫機構不均衡の影響が考えられていますが、その機序は明らかではありません。大腸腫瘍で悪性度の変化に応じて周囲の炎症細胞の状態が変化することが報告されており、HIV感染状態により大腸腫瘍への免疫反応が異なる可能性が考えられます。

本研究では、東京大学医科学研究所附属病院をこれまでに受診された大腸腫瘍の患者様の診療時の病理組織標本と診療情報を用いて、年齢、性別、生活習慣、既往歴、持病、常用薬、HIV感染状態、検査データ、大腸腫瘍の病理所見と炎症細胞・免疫チェックポイント分子の状態、などを解析し、HIV感染状態による大腸腫瘍での炎症細胞浸潤状態の違いを比較検討することで腫瘍発生リスク増加機序の一端を解明し、HIV感染症診療に役立てることを目的としています。

この研究は東京大学医科学研究所倫理審査委員会の承認を得て研究機関の長の許可を受けて実施されます。

【研究期間】

2020年 6月 18日 ～ 2025年 3月 31日

【方法】 当院で診療を行った大腸腫瘍の患者様の診療時の病理組織標本と診療情報を用いて、上記のような臨床データを集積して、HIV感染状態をはじめとする患者背景と大腸腫瘍における炎症細胞浸潤状態の違いを検討します。

【対象となる患者様とご協力いただきたいこと】 2000 年1月以降 2021 年 4 月までに当院にて下部消化管内視鏡検査を受け、大腸腫瘍と診断された患者様のうち、HIV感染の患者様50名と、これらの患者様と年齢等の背景に近いHIV非感染の患者様100名を対象とします。ご協力いただきたいことは、該当する患者様の2021 年4月末までの診療時の病理組織標本と診療情報を本研究に使わせていただくことです。

【個人情報保護の方法】 診療情報を使わせていただくにあたっては、お名前や患者IDなど患者様を識別できる個人情報を取り除き、新たに研究用の番号を付けて管理します。研究用番号と個人情報の対応関係を記した表は鍵のかか

る保管庫にて個人情報保護管理者が厳重に管理して、あなたの個人情報を保護します。

【研究参加による利益・不利益】 利益：本調査に参加いただいた患者様個人には特に利益と考えられるようなことはありませんが、研究結果が今後の診療の発展につながる可能性があります。

不利益：保存されている診療情報、病理組織標本のみを用いるため、この研究のために新たなご負担をおかけすることはありません。

【研究成果の公表について】 研究成果が学術目的のために論文や学会で公表されることがありますが、その場合も、患者様の個人情報は上述のようにして厳重に守られますので、第三者に患者様の個人情報が明らかになることはありません。なお、論文等で研究成果を発表した場合には、研究成果の再現・反証を可能とするために、「東京大学医科学研究所生命科学系研究データ保存のガイドライン」に則り、病理組織標本及び情報を東京大学医科学研究所に長期間保存させていただくことをご了承ください。

【問い合わせ窓口】

本研究にご自身の病理組織標本及び診療情報が使用されることを辞退されたい場合には、下記問い合わせ窓口までご連絡ください。辞退の連絡を受けた場合、それ以降、患者様の病理組織標本及び診療情報を本研究に用いることはなく、辞退によって患者様が不利益を被ることはありません。しかしながら、辞退のご連絡を受けた時に、すでに研究成果が論文などで公表されていた場合は結果を廃棄できない場合がありますことをご了承ください。

その他、本研究へのご質問等がありましたらお問い合わせ下さい。

[研究責任者（問い合わせ窓口）]

東京大学医科学研究所附属病院

総合診療科 講師 松原康朗

〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1

TEL:03-3443-8111

FAX:03-5449-5456

E-mail: ma-yasu@ims.u-tokyo.ac.jp